

恋するデザイン

C o n t e n t s

恋するデザイン	5
僕の可愛いひと	237
彼女の本音と僕の嘘	267

恋するデザイン

母性保護論争、なんてものが起こったのは百年ほど前のことらしい。歴史や思想に疎いあたしは、ぶっちゃけ詳しい内容までは把握していない。

しかし、与謝野晶子だったか平塚らいてうだったか、今ではお歴々とも言うべき方々が女性の社会的地位向上のために議論した時代があったのだ——と、失礼ながらすこぶる曖昧に記憶している。

それから時は流れ流れて、平成の世、日本。

彼女達に現代社会における女性の生き様はいかなるものかと問われたならば……あたしは、「戦々恐々」とでも言っちゃりたい。

世の中、恐ろしいことばかりなのだ。

「あのう先生、ランチ、どうしますか」

事務所として間借りしている雑居ビルの一室、缶詰になっていた部屋がそろりと開封され、気弱

な質問がひとつ投げ込まれる。ついに、ついに外の世界へと、あたしの秘密が流出してしまったのだと思った。

朝から華麗に「考える人」のポーズを決め続けるというギネスへの挑戦——ではもちろんなくて、デスクを前に頭を抱えたきりさつぱり仕事を進めた形跡がない、という秘密が。

「いない」

うしろめたい気持ちもあって、あたしはそのままの格好で答える。

スチール製の扉は年代もので、蝶番はきいきい悲鳴のような音を立てる。歯の根がゆるむというか、背筋を毛虫が這うというか、とにかく体中の不快感という不快感を余すところなく呼び覚ましてくれる音だ。

「……いくら締め切りだからって、なにか食べないと倒れますよう」

声の方向に視線だけを移動させると、心配そうに眉尻を下げる子ウサギちゃんが一羽、ちらと見えた。子ウサギちゃん、というのはもちろん例えであって、ここがメルヘン世界、というわけじゃない。

現在地は都内某所。

そしてこの部屋は小野原デザイン事務所の本拠地——つまりあたし、小野原惟ちなみに二十九歳——が代表を務めるオフィスなのである。

ついでに子ウサギちゃんの名は水元香という。三つ年下のアシスタントで、外見はどこからどう

見ても可憐な少女でしかないのだけれど、一応性別は男だ。

確かめたことはないけれど。ついうっかり間違えたフリをして握ってみようかなあとは、思わないこともない。

「昨日もウイダーinゼリーしか摂ってないし、僕、心配で心配で」

「あのね、あたしの仕事部屋には来るなど何度も言ってるでしょうが。来週納品のチラシ、アイデアは固まったの？」

「ま、まだです。でも僕、先生のことが」

ぐずぐずと鼻声で、いかにも健気な様で訴えかけてくるものだから、あたしは耐えかねて鷲のマークの茶色い空き瓶を香に向けて放った。

「うわあっ」

ちなみにこれが朝からのマイ摂取カローリーの大半である。

「あたしを見張る暇があるなら、とっとと働きなさい！」

「ひいっ」

しっしっしと追い払って足先でドアを閉める。そうしてあたしはまた真っ白なクロッキューブックの前に、ひとり馬鹿でかいたため息を零すのだった。

あと二十四時間でプレゼンの日がやってくる。

もう、間に合うかどうかという瀬戸際だ。それこそランチなんて悠長に食べている場合じゃあないということを感じていただきたい。

かのレイモンド・ローウィ（たばこの「ピース」や「ラッキーストライク」、「コカ・コーラ」のディスプレイなどをデザインした人ね）に憧れてこの道を志したあたしは、巷に回る工業製品——つまりインダストリアルデザイン——を主として手がけている。そう、「デザイン」というとファッションだと思われがちだけれど、あたしの専門はプロダクトなのだ。

今はまだ仕事を選べる立場ではないから、お菓子のパッケージやチラシ、家具家電の類いなど、ありとあらゆるものを請け負ってはいるけれど。

華やかに見えて厳しい世界だ。とはいえ、女だからと言ってナメられたくはないし、妥協をしたら終わりだと思う——なんて、理想を語っていたら、すでに三十路は目前に迫りかけていた。

これはいわゆる崖っぷちつてやつだ。と一応、自覚はしている。ここ数年、彼氏はいないし、デートの予定だって皆無なのだから。

でも、言い訳をするわけではないけれど、この事務所を立ち上げてから、あたしにとつてなにより大切なのは、目先の締め切りとスタッフの生活。顔もわからない未来の旦那さまよりよっぽど現実的だし、ずっと切実だと思う。

てなわけで最近痛感しているのは、夢を追うのはある程度若いうちでなければできないのに、女

にとつてその期間はあまりにも短いということ。

不公平だ。男に生まれたかった。恨むよお母さん。ついでに言わせてもらえらるなら、お見合い写真を送ってくるの、いい加減やめてよ。いえ、やめていただけですか。やめていただけたら助かります。

「ううううう」

腹の奥底から声を絞^{しほ}り出し、頭を抱える。こんな姿、人に見られようものなら一一九番され、救急隊が駆けつけること必至だ。

今、あたしを悩ませているのは、小さなペットボトル飲料のパッケージ及びボトルのデザイン。

コンセプトは「健康」で、クライアントによると、セールスポイントは特許を取得したばかりの製法らしい。

それがどれだけ努力を積み重ねてでき上がったものなのかは、先週、研究室の方の熱弁ですつしり受け止めたばかりだ。失敗に失敗を重ね、開発に五年の歳月を要したとか。

だからあたしはそんな風にして完成した商品が、いかに体に優しいかを上手に消費者に伝えなければならぬ。いわばメッセンジャーの役割、それがデザイナーの仕事なのだ。

でも、考えれば考えるほど迷う。

いつだつてこうだ。自信なんて毎回ない。こんな自分が“先生”だなんて、笑える話。

ちよこつと雑誌に取り上げられて、ちよこつと名前が売れただけ。中身がご立派になったわけで

はないのに。

すつかり固まった体を背もたれに預けると、すりガラスの窓越しに真っ赤な夕日が見えた。

アイディアの降臨待ちで日が暮れた時の絶望感つたらない。死にたくなる。

氣付けば着ているニットは毛玉だらけだし、部屋から一歩も出ないからつて日がなノーメイク。

髪は伸び放題だし、ああ、前回美容室に行ったのはいつのことだっただろう。

負のスパイラルで落ち込んで、頭も真っ白。

きれいさっぱり、ノーアイディアだ。

「……もう終わりだ。あたしの想像力、死んだ……」

でもつてこんな独り言ばかり言ってしまうあたしは、女としても終わっている。誰か、ミイラにでもしてやつてちょうだい。

デスクの上で紙を千切りはじめた途端（飽きるとついやつちゃうクセ）、ドアがかちやりと開いた。見れば、潤んだ瞳がそこから覗^{のぞ}いている。

「先生、死んじゃ嫌ですよ」

「おまえはストーカーか、杏」

彼はもともと同じデザイン事務所で働いていた後輩で、あたしが独立すると言ったらくつついてきた奇特な人間だ。

ふわふわとした空気感のある天然パーマの髪は栗色で、大きな目はくつきりとした二重と長い

まつげに飾られている。まるで、ルーベンスの描く天使のごとき容貌ようぼうなのだ。

あたしが本気を出してエステに通ったとしても、絶対にあんなふうにはならない。

身長も百六十センチと小柄だし、男とは思えないほど繊細だし、思いやりがあつて気遣いができ、同僚の女の子にも受けがいい。

要するに、あたしとは正反対のヤマトナデシコな男、それが杳なのだ。

と、杳の背後から子ウサギちゃんその二——アシスタントの女の子が言う。

「先生、杳ったら先生がご飯食べるまで自分も食べないって断食してるんですよ」

「はあ？」

なんて無駄なことを。呆あきれてそれ以上ものが言えなくなったあたしを見て、杳は青くなって彼女を振り返り、ひどいよ、と泣きそうな声で訴えた。

「内緒にするって約束したじゃないかあつ」

女子高生か。ついついおばさん目線で冷ややかに見てしまう。と、彼はふりふり怒った後、ふたたびあたしに向き直った。

「そうだ、あの、先生これ」

目の前に差し出されたのはあたし愛用のデザートプレートだった。そこには丸くてこんがりきつね色の物体が山と盛られている。

「む、なに？」

むせ返るほど甘い、バニラの匂い。その向こうで杳はほわほわと柔らかく笑う。思わずふにゃふにゃと情けない顔で笑い返しそうになった。

「ドーナツです。休憩時間に揚げたんですけど、いかがですか」

「揚げた、つて、杳が？」

「ハイ。ホットケーキミックスがあつたので」

ああ、そう言えば。

ホットケーキが無性に食べたくなって買ったはいいけれど、作るのが面倒で放置し続けた結果、賞味期限が切れそうになっていたアレか。

「先生、甘いものお嫌いでしたっけ」

「いや、そうじゃないけど」

甘い味の揚げ物というのが苦手というか、締め切り前は胃がキリキリするとか——でも。

「お邪魔なら片付けますよ」

「ううん、もううわ」

作ってもらったものを、食べないわけにはいかない。覚悟を決めてプレートを受け取る。

「ありがとうございますっ」

そう言つて頭を下げたのは杳だった。お礼を言わなければならぬのは、あたしのほうなのに。

「やっぱり先生は優しいですね」

綿あめみたいな微笑み。あたしには到底できない表情だ。

「優しい？ あたしが？」

「はい。やさしいですよ。だって、先生は誰かが作ったものを絶対に無駄にしないですもん。お仕事の時も、そうじゃない時も」

「そりゃ、自分も作り手の端くれとして」

「僕、先生のそういうところ大好きです」

「そ、ありがと」

砂糖まみれのそれをひとつ頬張ると、やさしくて懐かしい味がした。心が少し、ほどけた気になる。そういえばこういうの、実家を出て以来食べていなかったっけ。

「うん、美味い」

頬を緩めたあたしを前に、杏は嬉しそうに目を細める。

「よかったあ。じゃあ、明日からランチも出前じゃなくて僕が作りますね。夕飯も、夜食も」

「なんで」

「そうしたら先生、食べないわけにいかないでしょ」

痛いところをつかれて焦あせってしまふ。

「そ、そりゃありがたいけど、杏にはアシスタントとしての本分ってやつがあるでしょ。デザインがやりたくてここに来たんだよね？ そんな、雑用係みたいな面倒なこと」

「面倒だなんてとんでもない。僕、料理好きですし。仕事も疎おろそかにはしませんから、ね？」

「まあ、男だって家事ができるほうがモテる時代だけだよ」

「なら任せてもらえませんか、先生の食事」

杏の必殺「きらきら真剣まなざし攻撃」にうつかりKOされそうになって、あたしは顔を背ける。

「気持ちはあるがたいんだけど、これ以上甘やかされると……あたし女としてヤバイもの」

「ヤバくなんてないです！ 先生はいつだって凛りん々たつしくて、仕事に一生懸命で、カッコよくて、みんなの憧あこがれですから」

「……そうかなあ」

むずがゆい。褒められて悪い気はしないけれど、照れが先立って素直に喜ぶことができない。

杏はいつも女の子に対してこうなのだろうか。優しくいつか損するよ、なんて勝手なことを思った。

すると彼は珍しく自信満々の顔で言う。

「だから余計なことは心配せずに、先生は思いつき仕事に打ち込んでいいんです」

「そう……？」

衝撃だった。そんなことを言われたのは初めてだ。

両親にはいつだって「仕事は一生のパートナーじゃない」「仕事と結婚するのか」なんて叱責しっせきされるばかりだったから。

思いっきり打ち込んでいい、なんて、ああ、なんだか泣きそう。

「そうですよ。くれぐれも、無理は禁物ですけど」

こうして、杳は優しい笑顔を置き土産に部屋を出ていった。

温かくて甘いドーナツを平らげ、あたしはふうと息を吐く。

糖分を補給したお陰か、休憩を入れたお陰か、その後の仕事がかどったことは言うまでもない。

ご飯はやはり、きちんと三食たべなければと反省した次第。

「お疲れさまです。ランチ、できましたよお！」

杳はというと、翌日からさっそくマイエプロンを持参し、料理の腕をふるってくれた。十六雑穀のご飯や煮しめなど、ヘルシーな料理はありがたい限りだ。アシスタントの女の子たちの評判も上々で、その腕もさることながら、女心を熟知したメニューには感心してしまう。

「んー、今日も最高っ」

こうして、ランチタイムに幸せを噛みしめる日々が始まった。

（あー、杳みたいな嫁が欲しいわ）

そう心の中で呟いたあたしにおかわりを差し出しながら、彼は得意の綿あめスマイル。そして言った。

「僕以外の男性社員、採用したらダメですよ」

「どうして」

「この先もずっと、先生のご飯を作る男は僕だけですからね」

……うん？

2

Q…部下に手を出そうとしている（むしろ出した）フトドキモノはどこ誰でしょう。

A…小野原の惟とかいう女、つまりそれはあたしです。

「はあ」

二十九歳独身、あたしは今、人生の岐路に立たされている。

一方は婚活、つまり結婚コース。仕事はほどほどに、旦那さまを支えていく堅実な人生だ。もう一方は仕事一筋、生涯独身コース。親が煩いのさえ我慢すれば、自分の時間を楽しめる悠々自適の人生をさす。

しかしながらその両方に背を向けて、人の道を外れようとしている自分がここにいる。

アカン、アカンて——脳内でナニワのオバチャンAが言う——アンタの人生、間違うとるよ。口

くな死に方せえへんで！ やめとき！ 年下の男をつかまえて一生下働きさせようだなんて！

「うわあ！ すみません、大遅刻です。待ちました？ 服、選ぶのに手間どっちゃって」

公園のあたしがいるベンチに駆け寄ってくる杏は、タイトなパンツにゆるつとしたニットパーカーを羽織っていて、若々しいカジュアルルクだった。いつもの通勤服より幾分動きやすそうに見える。マールンカラーのふわふわヘアと綿あめより糖度の高そうな笑顔は今日も健在だ。

「い、いや別に待つちやいないけど、きよ、今日も可愛いね杏……」

「ありがとうございます。先生こそ、そのワンピース、すごく似合ってます。今日のオシャレ、僕のためですよね？」

「そ、そ、そん……」

護摩でも焚いているかのように顔全体が熱くなる。

思わず背を向けて早足で進むあたしは中学生日記もまっ青の純情ぶりだった。

否定しようとしてもしきれない。そうだ、あたしは今、杏を完全に異性として意識しているのだ。昨日の朝までは可愛い弟、いや妹くらいにしか思っていなかったのに、……キスつてものはすごい。たかがキス、されどキス、だ。単なる皮膚の接触なのに、どうしてだ。

つい反芻するように唇を撫でたら、ますます緊張が高まって、普通の表情の作り方がすっかりわからなくなつた。

事の起こりは、数十時間前にさかのぼる。

「あー、最近キスしてないなあ」

いっちゃんがそんなことを言い出したのは、ランチの真つ最中だった。

ちなみにメニューは、おからのコロツケとキャベツの千切り、しじみのみそ汁、玄米ご飯におしんこで、もちろん杏のお手製だ。

「私、軽く干物ですよ。先生は恋ってます？」

干物だなんて、あたしより二つも若い子が言う台詞じゃあない。

いっちゃんは本名を本宮いつかという。地味だけれど可愛い、花に例えるならポピーみたいな女の子だ。ファッションはツインニットと膝丈スカートが定番で、ミニ丈のものを履いているところはほとんど見ない。

「あのね、そんな暇があるように見える？ 第一、いっちゃんが干物なら、あたしなんて化石よ化石。博物館に寄贈されてやるっ」

石。博物館に寄贈されてやるっ」

「そんなあ。あ、メーカーの三木さんはどうです？ この間デートに行つたじゃないですか」

「あれは単なる接待。あたし、ああいうスーツがピチーツとしたスカした野郎は好きじゃないし」

「うわ。厳しい、先生」

思えばこのとき、あたしは杏が男だということをすっかり失念していた。いや、それを言うなら

杏の前で平然とキスの話題なんてふってくるいっちゃんこそ、恐らくそのことを忘れていたのだと思うけれど。

その杏はというと、テーブルの隅で、居心地悪そうに玄米ご飯をもそもそ咀嚼そじやくしていた。

「じゃあ先生の好みって？　どんな人となら結婚したいって思えます？」

「……口煩くわづらくない人。あたしに主婦業を押しつけないような、仕事が忙しくても文句を言わないような」

「それって杏じゃないですか」

いや、だいぶ違うような気がするけど。

あたしが言いたいのは、例えば一緒にいて「仕事と俺、どっちが大事なんだよ」とか子供じみたことを言わない人で、デート中に仕事のことを考えていてもそつとしておいてくれる人で、記念日を忘れても電話をしばらくかけなくても、温かく見守ってくれる懐深なつかしき男なのだ。

相手も同じように仕事で忙しければなお良いと思う。痛みを分かち合えるし、相互理解がしやすいから。……とはいえ、最後に付き合った男とはその忙しさが理由で別れたんだっけ。

「せつかくふたりともフリーなんだし、一回くらいデートでもしてみたらどうです」

「いっちゃん、あのね」

杏はまずかろう、杏は。あたしは前歯を見せて苦笑い。

だってどう考えたって、あたしと杏じゃあらゆる意味でデコボコで、つり合いつてものがまるで

とれない。

それに、こんな可愛い子に手を出したら逆セクハラで、めでたく犯罪者の仲間入りができそうだ。

「ちょうど今日の納品の後、連休ですし。ね、杏もそう思うでしょ」

「え、えと、僕は、先生さえよければ」

「はい、決まりですよ先生っ」

「……待てこら」

半分白目になりながらつつこんだものの、仕事が押していたからそれ以上雑談をしている暇はなくて、はつきり断るまでには至らなかった。

しかしあたしは中止にする気、満々だった。だってあの状況じゃ、杏は断りたくても断れなかっただろうし。そこで、仕事終わりに彼を缶詰部屋へ呼び出すことにした。いっちゃんに知られぬよう、こっそりパソコンにメールを送って。

「あのさ杏、明日のことなんだけど」

お休みの日くらい上司の顔を忘れてゆつくりしなよ。と言いたかったのに、彼の行動は驚くほど早かった。

「お店なら、インターネットで予約しておきました。最近できたばかりの有機野菜のレストラン、すつごく美味しいんですよ。待ち合わせ場所は向かいの公園でいいですか？」

「はいっ!？」

「じゃあ決定ですね」

この時のあたしの顔を写真に撮ったら、両目がぼつりと見事な点になっていたと思う。

「嬉しいな。夢みたいです。きつと通じないだろうなって思ってたから」

「な、なにが」

「僕が先生を好きってこと」

さらつと告白されて、今度はその、点になった目が飛び出そうになる。よ、杳があたしを、好き？嘘でしょ。

いや、でもそういういえば何度か、大好きとかなんとか、言われた気がしないでもない。そんなことを思い出したら、むしろ自分の鈍感さに啞然とした。

いつからだ。なんでだ。こんな女に、どうしてだ。

「初めて会った日から、ずっと憧れてたんです。有能なのに気取ったところがなくて、気さくでカッコよくて、素敵な人だなんて。だから、だから……」

感極まったのか、彼はつぶらな瞳に涙をたっぷり浮かべる。

「デート、できるだけ僕、うれしくて……」

「よ、杳」

「こんなの奇跡です。あ、りがと……ございます」

このくらいのこと奇跡とか言われても。

健気すぎる彼を見ていると、どうにももうしろめたくなってくる。自分が世間擦れすぎているせいだろうか。だとしたら、せめて杳にはこのまま無垢でいてほしいものだけ。

あたしは姉気分で、杳の頭をヨシヨシと撫でた。空気感のあるくせ毛はなんとも言えない手触りで、やはり子ウサギを彷彿とさせる。

「せんせ……」

「うん、とりあえず泣くのはやめよう」

まあ、デートくらいならしてやつてもいいか、なんて同情半分を覗き込むと、涙に濡れた瞳がぼつとこちらを見上げた。

ドキッとす。男だからというより、まるつきり少女の泣き顔に見えて。え、なに、この感覚。

そして、まさしくその瞬間だった。隙をついて、杳が少し背伸びをしたのは。

「――」

接触する唇と唇。

驚いたあたしの首筋に腕を回し、杳は器用に角度を変える。遠慮なく割り込んできた舌の感触に、声を上げそうになった。

(ん……っ、な、……なんだ、これは)

そう思ったのは、キスが久しぶりだったせいじゃない。

彼のキスはとろけそうに甘くて、つまるところ、うっとりするほど上手かった、のだ。腰が抜けるかと思った。

就寝する頃になって気付いた。そうだ、杓は手先が器用だったのだ。舌先まで器用だとは、さすがに予想できなかったけれど。

あれほど繊細なキス、初めてかもしれない。ガツガツした余裕のない男たちとは違う、気遣いのかたまりのようなキス。

もう一度、してみたい、と言ったら変に思われるだろうか。欲求不満の年増が可愛い年下男子に手を出すのはまずい。それはわかっている。

なのに、あんなキスをする杓ならそれ以上のこともきつと——、なんて妄想がとまらないあたりはもう、つける薬のない某病の重篤患者なのかもしれないなかった。

そんなわけで、あたしは今困っている。

これはいわば、第三の選択肢だ。もし杓と付き合って、万が一、いや億が一うまく事が運んで、兆が一結婚なんてことになれば、だ。

女としての幸せが手に入る上に、仕事もサポートしてもらえる。親も黙るだろうし、毎日ごはんも作ってもらえる。万々歳だ。これこそ、まさしく奇跡というやつじゃあなかるうか。

引き換えに杓の人生を犠牲にすること、請け合いだけれど。だって、あたしという限り永遠に部

下のポジションは確定なのだし。

良いのだろうか、あんなに純粋な彼をあたしの人生に巻き込んでしまつて。

「あのですね、先生」

「な、なに」

「僕、便利な男でかまいませんから、これからもずっと側に置いてくださいね」

迷うあたしを後押しするかのようにな、杓は言った。

「先生のこと、一生支えるのが僕の夢なんです」

健気すぎる。

あたしみたいな女にはもつたない相手だわ。そんなに優しいと本当に損をするからね。

けど、そこまで言うなら……出しちゃうよ。出しちゃうからね、手。

「……先生” って呼ぶの、やめない?」

「え?」

「恋人同士なら、” 惟 ” って呼んで」

ぱあっと目を輝かせる杓を見下ろし、あたしはとりあえずヒールの高さを下げるところから始めようと思った。

この時はまだ、予想もしていなかったのだ。自分がまさかこの、キスひとつで付き合いを了承してしまった小動物に身も心も翻弄される日が来るなんて。

「わあ、ついに発売されたんですね！」

仕事終わりの休憩室、杏は興奮を抑えきれない様子で女性向けファッション誌を捲る。辺りに銀粉をはいたかのようにきらきら輝くつづらな瞳は、到底二十六の男のものには見えな
い。その目に映っているのは、あたしがデザインを担当した腕時計の広告だった。

「感動です。こんな大々的に紹介されるなんて！」

「いや、それはメーカーが雑誌にタイアップ企画を持ち込んだからよ」

つまり広告費やらなにやらを払って、付録まで付けたわけだから当然の扱いなのだ。

さらに巻頭での掲載が可能になったのは、あたしがたまたまその編集長と旧知の仲だったから
で、いわゆるコネってやつなのだ。いざという時コネクションを活かすためには、パーティーに出
席しておくに限る。面倒臭いこと、この上ないけれど。

「出版社に問い合わせが殺到してるって、さっき連絡が来ましたよ」

「そ。なら今日は安心して眠れるわ」

三日ぶりにね。

「お祝いにワインでもあけましょうか。僕、チーズ切ってきます」

「うん。みんなはどうする？ 飲んでく？」

夕食の Pasta、最後のひとくちを頬張りながら見渡すと、なぜだかみんな揃って呆れ顔。

「クリスマスイブに飲み会を催してどうするんですか。私、帰ります」

「邪魔者は消えますから、おふたりでごゆっくりー」
「え、や、ちょ、待て」

そんなつもりはなかったのに、アシスタントの女の子たちはあつという間に席を立ってしまった。
去年はみんな飲み明かしたのに、薄情者め。

なんて、真の薄情者は事務所唯一の男子をモノにしてしまうあたしなのだろうけど。

「みんな帰っちゃいましたね」

「だねえ。杏は大丈夫なの？ 予定とか」

「……それ、わざと云ってるなら意地悪すぎますよ、惟さん」

むっとした杏は少しだけ男の顔をしていて、そんな彼に名前と呼ばれると照れ隠しで無表情にな
ってしまふあたしは世界屈指の意気地なしだ。

わかっけても耐えきれない。

だって、ずっと可愛い弟、むしろ妹みたいに思っていた杏が、あたしの、こつ、恋人だなんて！

「ワイン、赤でいいですか？」

「うん。あ、そだ、美味しい生ハムがあるのよ。昨日、文具メーカーの松田^{まつだ}くんにもらったんだけどね、スペインのなんとかっていうやつ」

どこにしまっただろう、記憶にない。冷蔵庫に入れたとは思うけれど、うっかりしまい忘れて常温で放置しているとしたら、すでに死亡確定だ。

「それならスライスして冷凍しておきましたよ。松田さん、最近よく来ますよね」

唇を尖らせて不満そうに言う杓を見て、あたしは咄嗟^{とつさ}に口元を押さえる。

失敗した。別の男にモノをもらったなんて話題ふるべきじゃあなかった。

「そ、そうかなあ。仕事、受けたからでしょ。ご機嫌伺いよ」

「昼時ばかり狙って来る気がします。ランチに誘うために」

さすが草食系と言うべきか、杓の観察眼はおなご級だ。普通の男より神経が繊細にできているのだろう。

実はこの間、松田くんから突然告白されたとか、言うべき？　こういうの、打ち明けておくべき？　でも、ショックを与えそうだしなあ。迷いながらも、席に戻った杓に話しかける。

「あのみ、杓」

「僕、松田さん、きらいです」

嫌い——ね。素直すぎる一言に、あたしは言葉を呑み込む。

たいして強くもないくせに、杓はワイングラスを一気にあけた。

「僕の惟さんに、べたべたさわるから、きらいです」

とろんとした目で、ささやかな独占欲を覗^{のぞ}かせる様は、可愛いことこの上ない。それに対し、ちよつとやそつとのアルコールでは顔色が変わらないあたしは、なんて可愛くないのだろう。

「……なら、杓もさわればいいのに」

小さく言って、手酌^{てしやく}をした。

付き合いだしてからしたことといえば、デートを一回とキスを数回。三十路直前のあたしには勿^{もち}体づつて出し惜しみするモノなんてないし、誘^{よび}ってくれさえすれば受け入れようと思っているのに——

「松田さん、カッコいいし、僕よりずっとお金持ちだし、背が高いし」

「こら杓、悪酔いしてるよ」

「惟さんとも、つり合うし……」

子供っぽいことをブツブツ言うのも可愛い、とあたしは思っているけれど、彼にとっては深刻みたいだ。いっちゃんと言っていた。杓はあたしを満足させる自信がないから、なかなか先へ進めな^いいでいるらしいと。

そんなの、別にかまわないのに。最初から杓まかせにしようなんて思っ^ってはいないもの。

とはいえ、それをこちらから切り出すのは、一歩間違えば嫌味になってしま^まうだろうから難しい。杓は、あんな外見でも一応は男なのだし。

……そうだなあ。

考えがないこともないあたしは、心の中で唸る。うん、まあ、とりあえず。

「あのね、一個だけ言わせてもらっていい？」

「……なんですか」

完全にでき上がってるな、これ。そのほうが照れずに言えそうだから助かるけれど。

「最近キレイだね、って言われたの、松田くん」

「や、やっぱり僕の惟さんに、手を出そーとし」

「最後まで聞け」

あたしは杵の頭を上から鷲つかみにした。

「前はそんなこと、言われなかったの。最近よ、最近。だからね、正直に答えたわ。恋人ができたからだ、って。杵と付き合いたしたこと、ちゃんと話したわよ」

彼の頼りない肩越し、見事な夜景が広がっている。仕事場ってのはただだけないけれど、一応はロマンチックなシチュエーションよね。

「これあげる。クリスマスプレゼント」

テーブルの下に置いておいた紙袋を差し出す。もしシラフだったら恥ずかしすぎて鼻血噴射間違いなしだ。

「世界にひとつしかない、例の時計の特注品」

製品は女性用で文字盤にピンクのラインストーンが施されているのだけれど、これは特別に頼み込んでデッドストックの淡いブラウンに付け替えてもらった。

杵のイメージにぴったりだったから。

「ぼ、僕に……？」

「他に誰がいるの。あたしの恋人は杵だけでしょ」

「あ、ありがとうございますっ、大事にします……！」

反応がいちいち可愛くて困ってしまう。思わずきゅんとなった胸を押さえると、いつもよりずっと速い脈を打っていた。おかしいな、あたしの乙女心、これくらいでときめくほどヤワな構造じゃなかったはずなのに。

すると杵は突如席を立ち、覚束ない足取りでアシスタント部屋に向かった。かと思ふと、両手に余るほどの馬鹿でかい包みを抱えて戻ってきた。

「これ、僕からです。抱きまくらにでもしてください」

そう言っただけで顔をほころばせながら、こちらに差し出す。なんて健気な、あたしのサンタクロース。

ありがとう、と言いながら包みを開くと、彼の髪に似た手触りの、長毛のデイベアが姿を現した。こんな少女趣味なプレゼントをもらったのは生まれて初めてだ。

しかし……抱きまくら、ねえ。

「断る」

「ええっ、そんなあ」

「うちのベッド、せまいもん」

言って、あたしはグラスに残っていたワインを、決意とともに流し込む。

「コイツと寝たら……、なくなるよ」

これまでこっちから誘わなかったのは、あたしのほうが目上だからだ。杓には断りようがないし、逆セクハラにもなりかねない。

でも今夜は、今夜だけは。

「……杓が入る場所、なくなっちゃうよ。いいの？」

今夜だけは、アルコールのせいにしたって許されるはず。だって、聖夜^{イヴ}だもの。

「え、あの、ゆっ、惟さ……」

「あたし、明日の朝ごはんは和食がいい。杓が焼いた鮭が食べたい」

「ほ、本気ですか」

「わざわざこんな嘘、つかないわよ」

ああ、やっぱり恥ずかしい。恥ずかしくて死にそうだ。

クマの爛々^{らんらん}と光る目が妙に気になって、リボンをそこに結び直した。見なくてよろしい。

「杓は本気じゃないの？ あたしのこと」

「そ、そういうわけじゃ」

「じゃあ、あたしとするの嫌？」

焦^{あせ}ってかぶりを振った彼は、ワインボトルを持ち上げようとしていたあたしの手をとめる。

「……お酒の勢い、じゃ駄目です。惟さんのこと、ちゃんと、大切にしたいんです……」

大切に、なんて言われたのも、初めてかもしれない。あたしは杓に驚かされてばかりだ。

「そ、それに、がっかりされたら困るし、僕、そういうの、あまり慣れてないから——ん！」

照れる彼に短くキスして、席を立つ。これ以上言い訳されたら、フオローに困る。

「あたしはそのままの杓がいいの」

「で、でも」

「いいって言ってるんだからいいの。ね、酔いをさましながら帰りましょ」

ここまでできたら、急がば回れだなんて言っていられない。もう待てそうにない。だって、可愛すぎるんだもの。

「……はい」

こうして、あたしは珍しくケンタッキーのパーティーバーレルより大きなものを聖夜^{イヴ}にお持ち帰りしたのだった。めでたし。

イベントの翌朝なんて大嫌いだ——あたしはずっと、そう思っていた。

それはなにもクリスマスに限った話じゃあない。飲み会や忘年会やお祭りごと、少人数で過ごすパーティーも含め、あらゆるイベントに共通して言えることだ。

どこでどうハッスルしたのか、体中あちこちの関節がみしみし言うし、二日酔いは免れないし、ごくまれに見覚えのない部屋で寝ていたりするし……いや、それは過去の話か。

とにかく、なんといつても、自分の浮かれぶりを思い出すだに、ずばっと切腹したくなるのだ。はしやぎまくって飲んだくれて、無礼講とか騒ぐ自分なんて、恥ずかしいったらありやしない。

結果は目に見えているにもかかわらず、毎度毎度同じ失敗を繰り返してしまう短絡的な脳細胞が憎い。

だからあたしは、後悔とともに迎える翌朝なんて大っ嫌いだっただの。

「つて、思ってたんだけどな……」

またやってしまいましたよ。

と、ぼつり呟いて寝返りをうつ。

薄暗闇のなか、狭いベッドの端っこで携帯電話を開いたら、「12/25 03:10」と表示されていた。ああ、いつの間に寝てしまったのだろう。暖房がつけばなした。伸びをしながらあくびをひとつ。しかし不思議と吐息からアルコール臭さはのぼつてこない。

と、そこに柔らかない小動物がすり寄ってきて、あたしは重要なことを思い出した。

(そうだ、杓。クリスマスにかこつけてお持ち帰りしちゃったんだっけ)

ほんやりと浮かび上がる輪郭は、細い、というより淡い、と表現したくなるほど頼りない。指の腹でその線をなぞりながら、彼であることを再確認する。

妙な気分。

杓が、もう五年以上も単なる部下だと思っていた男が、いやむしろ、男とすら思っていなかった生き物が裸のまま、あたしに寄り添って眠っているなんて。

そつと、起こさないように抱きしめると、湯たんぽかと思うような温かさだった。

昨夜は照れ臭かったけど、なんというか、正直——驚いたというのが感想だ。

「あの、ほ、本当にお邪魔していいんでしょうか」

玄関に到着してなお及び腰の彼を、あたしはリードするつもりで寝室へ連れ込んだ。そうだ、こ

ちらが主導権を握っておくつもりだったのだ、そのときまでは。

しかし――

「――惟さん」

呼ばれたときにはすでに、彼はあたしの上にいる。ベッドに押し倒されたのだ、と気付いたのは、その柔らかな前髪が鼻先を掠めたからで、あの一瞬で押し倒した早技は本当に、忍術かと思うほど鮮やかだった。

「嫌だと思ったら、いつでもとめてくださいね」

え、ちよつと待て。今、一体なにが起きてるんだ。

「んっ」

と、油断していたところに、落ちてきたのは例の破壊力抜群なキスで。

「ん、ん……っ……ふ」

浅く、深く、繰り返し侵入してくる舌の動きはなめらかすぎて、口どけのいいチョコレートでも食べているみたいな気になる。やつぱり杓、キス、上手い。

「う……んっ」

淡い快感に思わず背を反らせると、そこにすかさず滑り込んできた手が、ブラのホックを器用に外した。

(こんなこと、どこで覚えたのかしら……)

意外なことが多すぎて、しなくてもいい想像をしてしまう。あたしの前にも、恋人がいたのかしら、とか。そんな脳ミソを戒めるように、杓はあたしの舌を甘噛みする。痛くはない。むしろ、もっと強く噛まれたっていいくらい……

うつとりしながら彼の首に腕を回すと、ふいにストッキングの上から太股を撫でられ、思わず悶えてしまった。

「ひ、あっ」

「惟さんの足、僕、好きです」

「いやだ、もう、く、すぐたいたいっば」

「ずっと、ずっと綺麗だなんて思っていました」

「ん、やめ……そんなに見ないですよ。年増の足、よ……」

しかも細くも長くもない。すなわち、じっくりお見せするようなものではないのだ。

なのに杓はかしくように体を屈め、足の形を確かめるように脛や甲にまでキスをしてくる。

あまりにも非現実的な光景に、めまいを覚えた。忠誠を誓われているみたいだ。

「綺麗ですよ。……いつも、見とれました」

その後、服を脱がせにかかる動作は焦っているふうでもましてや乱暴でもなくて、こっちも思わず見とれるほど優しくかった。それから杓は自分の服もするする脱いだ。

同じ優しさであらわな両胸をつかまれたら、我ながら情けないくらい細い声が漏れてしまった。

「……っあ、……っ」

こんな声をあげたのは何ヶ月ぶりだろう。

「あ、っは、……あ、ふぁっ」

乳房の奥の方までほぐすような指の動き。どうしよう、気持ちいい。触れられてもいない先端が、勝手にツンと立ち上がる。

「惟さん……、惟さんの体、こんなに柔らかいなんて思わなかった」

「ん、……引き締まってなくてがっかりした？」

「いえ、そういうことじゃ。惟さんはいつもしゃきつと背筋が伸びてて……もつと強いイメージがあつたから……こんなにどこもかしこも柔らかくて手触りがいいなんて予想外で」

こちらこそ、杳にそんな台詞せりふをささやかれる日が来るなんて予想外だったわ。

広げた両足の間に顔をうずめられて、あたしは浅く息を吐く。本当に予想外よ、こんなの。

「ん、アっ……は、あ……んっ」

ソコを丁寧な唇で押し広げながら、杳は舌先を動かす。感心してしまうほど器用な舐め方だ。時々、ものすごく感じる部分に触れられて、そのたび腰が跳ね上がった。

「あ……っ杳、……そこばっかり、っ」

「嫌、ですか」

「んうっ……ううん、好……き」

「なら、もう少し」

杳のことだ、もつとオクテだろうと思っていたのに。

様々な快感と倒錯感が入り交じって、体の芯しんからどんどん熱くなる。

「……惟さん、……っ」

それは彼も同じようで、見上げる顔にはもう、最初の余裕など微塵みじんもなかった。

滲む汗に気付いて、胸が詰まる。頑張ってくれたのよね、あたしのために。

「ね、杳、もう、しよう？」

まだだめですよ、とか準備が、とかごちゃごちゃ言う声は聞こえただけ、あたしは腰を浮かせて、彼をさりげなくその位置まで導いた。

「大丈夫。今日……安全日だから」

「でも、まだ」

「お願い、これ以上焦あせらさないで」

ねえ、早く。

誘うように彼自身を滑らせて、ねだった。ねだるだけ、のつもりだった。

「ふ、あ」

なのに、昂たかりすぎたあたしの体は勝手にそれを浅く受け入れる。

あ、ダメ。せつかくの杳のリードを台無しにしちゃ……そう思うのに、とめられない。とめたくない。

彼にしがみつき、腰を突き上げて自らそれを奥まで呑み込んだ。根元までしつかり埋めたところ
で、とめていた息を吐く。

「ッ、よ、う……入ってる、わ……」

ああ、背筋が、逆撫でされているみたいにゾクゾクする。

「……っ、ゆいさ……温か、い」

「ンっ、杓、お願い、動いて……っ」

そこにいるんだってことを、もっと強く感じさせて。

腰を揺らしてねだると、内側をぐるりとかきまぜるように擦られた。痺れるような刺激が、腰骨
の内側に走る。

「ん、や、あああっ」

久しぶりだから？ あたし、感じすぎてる気がする。

「す、みません、痛かったですか」

「ち、がうの、……つきもち、よくて……」

「……よかった」

ゆるゆると船を漕ぐように揺らされて、同時に両胸を優しく弄られて、その上時々深いキスをさ
れて、あたしの脳は自然と深く酔い始める。

「……っあの、惟さ、そんなに締めないでくださ……」

「え？」

「だ、から、ダメですってば……！」

杓はそう言って、突然動きをとめた。限界、とでも言いたげな顔で。

「す、みませ……っ——っ」

内壁が、さらに押し広げられる感じがする。なにが起こっているのか察したあたしは、彼を抱き
寄せてささやいた。

「大丈夫。我慢しないで」

「……あ、の、でもっ」

「いいからそこに出して。出されたい。あたし、杓に、ナカ、いっぱいにされたい」

言うや否や、奥にほとばしるものを感じて目を閉じた。別にあたしが達したわけじゃないのに、
なんだろう、この満足感。

「すみません……」

直後、杓が長い息を申し訳なさそうに吐いたから、汗ばんで張りついている彼の髪をかきあげて、
額にちゅっとキスをした。可愛い。

「どうして謝るの。まだ終わりじゃないでしょ？」

「え」

「若いのに一度で打ちどめとか言わないわよね」

にっこり笑って言う。夜はまだまだ、これからよ？

それからあたしたちは順番にシャワーを浴びて、一息いれてからベッドの上でふたたび向き合った。

「ようう」

さっそく先程のお返しをさせてもらおうと、あたしは体がかがめて舌を出す。そうしてソレの先端をチロリと舐めたら、

「な、なにしてるんですかっ」

大慌て、といった様子でひきはがされてしまった。

「なに……って、そりゃ、フ」

「うわあああ、言わないでください、そんな卑猥な言葉！」

「聞いたのはそっちじゃないのよ。じゃあ再起動のための準備運動、とか言っとく？」

「日常の単語に置き換えないでくださいっ。パソコンを再起動するとき、思い出しちゃうじゃないですか！」

どれだけ繊細なんだ、この男は。と白い目を向けかけたら、彼は悲しげな表情になり、ぼつり、言った。

「……僕、惟さんにそんなこと、させたかったわけじゃ……」

本当に不思議でならない。男だったらこういうの普通、喜ぶでしょうに。まあ、でも、これでこそ杳か。

数秒悩んだ後、あたしはえいやつと彼を押し倒し、失礼してその上にまたがらせていただいた。

「わかったわ。じゃあ、口でするのはやめる。それならいいでしょ」

いいわよね。

腰を落として、脚の付け根でソレを捉えたのは、挿れるためじゃあない。ただ、擦りつけていじめるためだ。

洗い流したはずなのにぬるりとするのは、先程受けとめた液体が出てきたからだろう。

「ゆいさん、っ！」

「これ以上の拒否は禁止」

短いキスで反論を封じ、彼のモノの上でやさしく滑る。前後に、それからわずかに左右にも。

「ん、く、っ」

されるがままになっていて杳の左手を引き寄せ、あたしの胸に触れさせました。握らせたり、撫でさせたり、時々、唾液を零して滑りをよくしたりして、ぐにゅぐにゅと大胆に。

このくらい激しく揉まれるほうが好きなのよね、実は。

「だ、めです、こんな、ゆ……惟さん……っ」

すると突然、杳が一気に上半身を起こした。

「わ！」

はずみでうしろに倒れ込んだあたしは、あやうくベッドから落下しそうになって、両手でシートにしがみつく。危ない。

そんな不安定な格好のまま奥まで貫かれる衝撃は、人生初、と言っているほど強烈だった。

「んあっ、あ、杳、——っあ、すご、なにこれ、えっ」

「もう、耐えきれないです……っ」

内壁をななめに擦られると、そのたびにビクン、ビクン、と肩が跳ねた。こんなところ、弱かったんだ、あたし。

「っああ、は、もつと……っ、お願い……動くの、やめないで……っ」

半分はもう、無意識だった。もつと感じたい、昇りつめたい、けれどまだ終わりたくない。なのに、腰を動かしてねだってしまう。

臙げな視界。聞こえてくるのは、杳の荒い息遣いと自らの吐息、そして淫らな水音だけ。

すごい、杳。杳とするのが、こんなにいいなんて思わなかった。

「よう、杳……っ、きもちいい、あつ、あ、イっちゃっ……」

軽い到達点に、内壁が彼を欲して蠢く。杳は動きをとめようとするけれど、あたしはこれで許すつもりなんてなかった。

「ふあっ、あ、やめないで、もう一回、このままもつとよくして」

快感に吞まれて動けなくなりそうだったけれど、それでも腰を揺らし、彼を下からめちやくちやに攻める。少しすると杳も覚悟を決めたのか、あたしを膝の上に担ぎ上げて最奥にまで押し入ってきた。

「あ、っあ、あ」

達したばかりの体はあちこちが敏感で、頭がショートしそうになる。

指先が痺れているだけでなく、全身の感覚がおかしい。漂っている空気さえ甘い、気がする。

「はあっ、あ、あ、杳、よう……っ！」

揺さぶられながら、彼の首にしがみついた。さつきよりもつといい。数倍いい。

内壁はすでにコントロールがきかないほど、痙攣のような締めつけを始めていて——

「……キス、してもいい、ですか……っ」

「う、っん、んん……っ……ん——」

そうして唇を重ね、とろけるような舌を受け入れた瞬間、瞼の裏は真っ白な閃光に包まれたのだ。つた。

その先の記憶は、霧の中のように朦朧としている。

めちやくちやに絡み合って、あたしは多分、年甲斐もなく乱れたのだと思うけれど。

「好きです。惟、さん、大好きです……」

不思議と後悔などなくて、むしろ、幸福感ばかりを得たというのが実感。

「ごめんね、あたし、鈍感で」

なかなか杳の気持ちに気付けなくて。

小声で詫びて、寄り添ったまま目を閉じる。あつたかい。しかし二度寝をしようにも、すっかり目が冴えてしまつてできそうにない。

と、クウクウとかすかな寝息が耳元で響いたから、あたしは頬を緩めてしまった。

やだ、二十六の男が立てる寝息じゃないでしょ、それ。いまだき、子猫だつてもつとデカいびきをかいて寝るわよ。しからは杳は、子猫以下の小動物つてことか。

「……ゆい、しゃ……ん………クウ」

「ぶはっ」

鼻血を出さんばかりの勢いで噴き出してしまった。可愛い。可愛すぎて、三年先まで癒された気分だ。

こんなに可愛いフリーの男子がこの世にまだ生息していたなんて、神様ありがとう。しっかりと頂戴いたしました。

独立してからというものの、恋愛なんて二の次で、がんがん働いてはシングルライフを楽しんできただけで、そこで培った価値観がちやぶ台返しみたいにひっくり返されてしまった気分だわ。

この先、恋人を作るなら自分より年収が上の人と決めていたし、利口でしたたかな男が相手なら

五分五分の関係でうまくやれるんじゃないか、なんて思っていたけれど、はつきり言ってそんな関係、あつてもなくてもあたしにはどうでもよかったのだろう。対抗心で張り合いつつも、なにかと手助けしてもらえて便利だろうけど、きつと長くは続かない。だつて癒されないもの。

そうか、あたしに必要なのは可愛いお嫁さんだつたわけね。納得。

「杳。ようう、起きて」

もぞもぞとかき分け進んだシーツの中で足を絡め、ささやく。胸に手を乗せると、意外にもしっかりと筋肉がそこにあつた。案外腕力があるんだな、というのも昨夜発見したこと。

東の空が白んできた。月影の名残りが、溶けかかった氷のように空へと馴染みはじめている。

美味しい朝食タイムは近い。だけど、その前に。

「うむ、ゆい、しゃん」

「……ねえ、もう一回襲つちやつてもいい?」

「んう………?」

可愛いお嫁さんをおかわり希望。

何度も抱きしめて、その柔らかい髪をめちゃくちゃに撫でるの。

そうしたら、きつと今までに見たことのないようなぴかぴかの朝日がのぼるから。

クリスマスのイルミネーションより、ずっとずっと綺麗な一日がやつてくるから。

そんな気がして、あたしはなんだか、朝になるのがとても楽しみだった。

5

年末年始と聞いて、真っ先に思いつくのは忘年会および新年会だろう。

年中行事という大義名分を掲げてだらっと飲みまくる、素晴らしきかなニッポンの風習。翌朝は後悔の塊と化すあたし、それでも飲まずにはいられない。とはいえ、別にうつつふんが溜まっているとか、ウサを晴らしたいとかじゃあない。

年明けから春までの期間には憂鬱なアレが待っているから、その現実を忘れたいだけなのだ。

そう——他人まかせにしてばかりでもいられないアレ。この上なく面倒な作業にもかかわらず、サッパリ儲からないアレ。

……確定申告！

デザイン事務所を構えているとはいえ、あたしの稼ぎではまだまだ個人事業主レベルである。従業員はいるけれど、アシスタントレベルのお給料しか払えていない。もっと還元してあげたいとは思っているのだけれど、現実はなかなかに厳しい。

で、確定申告。

去年の今ごろも領収書をちゃんとまとめておくべきだったと散々後悔したはずなのに、溢れかえった書類箱を見て啞然とする。ちっとも進歩がない自分に拍手喝采だ。

「よくまあここまで放置したもんだ、万歳。格安料金で処理してやるから、おまえも手伝え」

とは専門学校同期、名嘉史朗。現在の表情をあらわす言葉はカツコ苦笑、というより呆れ顔だ。

「ほ、放置してたわけじゃないわよ。帳簿ならそれなりにつけてるわ」

「それでどうしてこんなに記入漏れが発生するんだよ」

「この領収書のくしゃくしゃぶりを見ればわかるでしょ。財布の隅とかバッグの底とかに潜んでいやがったのよ。こいつらの擬態能力ときたらカメレオンに勝るとも劣らないわ」

言うど、目の前の呆れ顔には嫌悪に似たものが滲んだ。

「おまえ、いまだに変人だな。学生時代は風来坊だったし」

「なによ。グラフィック科卒で税理士やつてる変わり者のアンタに言われたくない」

「年下のクセに生意気な」

「年上っただけで偉そうに」

史朗は馬面でクツクツと笑う。久々に会ったけれど変わっていない。昔からこんな奴なのだ、こいつは。

ご立派に四年制お大学を卒業したくせにデザインの専門学校に入りなおした変人で、だから彼はあたしより四つだか五つだかオッサンらしい。しかしお互いに捻くれてるせいとか、癩だけど気が

合う、数少ない友人のひとりだ。

学生時代、授業でCDジャケットのデザインが課題に出されたとき、史朗は一晩で三十種類も製作してきたツワモノだ。

かたやあたしは販売店に出回る商品同然の状態にまで仕上げ——要するにCDケースに収めてキヤラメル包装をし——さらに販促ポスターと併せて提出した商品フェチである。

ふたりとも凝り性だったから、一緒にいると妙にしっくりきたものだ。ライバルとして反目しあったり衝突したこともあるけれど……実は彼とは友人以上恋人未満の関係だった過去がある。

「お疲れさまですうっ」

作業開始から十分後、ドリップしたての熱々コーヒーを手に、杓が缶詰部屋のドアを開く。

「あまり根を詰めないでくださいね。あ、先生のぶんには胃を傷めないようにミルク、入れておきましたから」

「ありがと、杓」

電卓を叩きながらさっそくひとすすりすると、ちよっぴり甘い蜂蜜の味がした。ハニーラテだ。

「ん、おいし」

「よかった。あ、名嘉さんはお砂糖とミルク、お使いになりますか？」

「いや、いらね」

「じゃあ、なにか必要なものがあればいつでも呼んでくださいね」

杓が出て行くと同時に、史朗はまたもクックと肩を揺する。

「なんだあれ、メイド喫茶？　じゃなきゃペットか」

「そんなわけあるか。あたしの部下よ」

ついでに恋人なの。とはなぜだろう、言いにくい。

「なあ、作業が終わったら酒でも飲むか。遅ればせながら新年会」

「うん、じゃあ焼き鳥ね、焼き鳥」

「いいねえ」

誘いを断る習慣のないあたしは、即答してからもすっかり忘れていた。彼が女遊びの達人だというのを。加えて昔、飲んだ夜はいつも史朗の家に一泊していたことを。

当然、なにもなかったとは言わない。

「うああ、終わったあ！　目が死ぬ」

「惟の分際でよくやった。褒めてつかわす」

「……殴りたいの」

史朗が偉そうにそっくり返ったから、あたしは握り拳を顔の横にかまえた。

「オンナに殴られるなら本望だね」

「悪趣味。最低。悪霊退散っ」

「惟が俺の靴を舐めるなら、喜んで成仏してやろう」

「残念ね、幽霊には足がないって相場が決まってるのよ」

この男、これで風貌ふうぼうはなかなか見られるとは、癩しかに障さわるったらない。

史朗は税理士をやっているわりに、一見してガテン系で、とはいえ骨太すぎるわけでもなく、全体的にはやや細身で、筋肉だけを上手に盛り付けたような姿形をしている。

学生の頃には有名俳優に激似だったせいか、校門前で出待ちをしている女子高生をよく見かけたものだった。日替わりランチのように、連れている女がころころ替わったつけ。合計何人食ったのか、見当もつかない。

「おし、行くか。まだやってるかな、学生寮の横の焼き鳥屋」

ジャケットを羽織りつつドアを開ける史朗の背中がやけに大きく感じられるのは、最近、小動物に目のピントを合わせすぎたせいだろう。

「あそこ？ なら角の炭火にしない？」

「なんだ、懐かしさより味をとるのか」

「当たり前でしょ。史朗と懐かしみたい過去なんてないし」

その後、あたしは仕事で接待に出かけるときと同様にアシスタント部屋へ寄って事務所の鍵を預け、史朗と角の焼き鳥屋へ飲みに行くことを告げた。杳は、気をつけて行ってきてくださいねと笑

顔で送り出してくれたから、とくに気にすることもなく、普段通りに事務所をあとにしたのだ。

だから史朗がそれを言い出したとき、しまった、と血の気が引いたのだった。

「惟、ノーマン・ロックウェル、好きだったよな」

「うん、今も好きだし」

ロックウェルはローウィ同様にあたしが敬愛する芸術家のひとりである。アーリーアメリカン・アートのモダンな雰囲気はどれも好きだけれど。

「こないだ買ったんだよ」

「なにを」

あたしはビールジョッキを傾けながら問う。やっぱり生はうまい。ビールは冬でもキーンと冷えたやつに限る。

「サイン入りのリトグラフ五枚セット」

「ぶっ、ウソッ!？」

吐き飛ばした泡を顔面で受けとめた史朗は「汚エな」と眉をひそめた。

「……マジだったの。知り合いに三百万で譲ゆづってもらったんだ」

「ちよ、それ本物？」

ロックウェルのサイン入りでその値段は安過ぎる。それならあたしも欲しいくらいだ。

「当たり前だ。鑑定済みだし」

史朗はクックと八重歯をのぞかせて笑う。

コイツの事務所、けっこう儲かっていやがるな。腹立つわ。そう毒を吐こうとしたあたしに、彼はあざとい誘惑の罫を投げかけた。

「見せてやるうか」

「本当に!? 見る見る!」

「よし、じゃあウチで飲み直そうぜ」

「……はっ?」

「寝ぼけた声出してんじゃねえよ。見るんだろ、ロックウエル」

しれっとした顔で立ち上がる彼を見上げ、硬直してしまう。

(マズい、はめられた)

こういう男を世間ではテダレと呼ぶのだ。付き合ってもいない男に下心丸見えで泊まりにこいよ、と言われてホイホイついていく女はいない。それを知っているから史朗は、泊まりにこいなんていう直接的なことは絶対に、言わない。

ただ、女がどうしても部屋に上がり込みたくなるようなエサをボンと与えるだけ。

小狡いといふかなんというか、女の扱いに長けている男が使う手口というのは大概こうなのだ。

「惟、ワインは赤だったよな。チーズでも買ってくか」

「いや、あのさ史朗」

「画集も買ったんだよ。ほら、学生の頃話してたやつ」

さりげなく会計まで済ませて、先に店を出てゆく馬面男を、あたしは追いかけるしかなくなる。

そういうえば、初めて史朗とした時もこんなだったな。

苦い思い出が蘇る。あの日も新しいプリンターを買ったとか言われて、あたしはMO持参で部屋に上がり込んで……うっかりやってしまったのだ。

「あたし、今日は帰るから!」

「なんだ、ロックウエルには飽きた?」

「ち、違うけど」

ああもう、すっかり史朗のペースじゃないの。

「もう、ああいう奔放な生活、やめたのよ」

「へえ、男でもできた……ワケねえか。おまえみたいな暴れ馬を乗りこなせるのは俺くらいだぞ」

「馬面に馬扱いされたくないんだけど」

久々に会ったというのに、手前勝手に口説くなど言いたい。むしろ殴りたい。

「見栄エはってんじゃねえよ。見てェんだろ、サイン入りリトグラフ」

それは見たい。見たいに決まっている。けれど。

あたしは史朗の腕を掴んで無理矢理振り向かせる。

「つ、……付き合ってる人がいるの。だからアンタと仕事以上のことはできない！」

「飲みに来てるじゃねえか。ふたりきりで」

「……そ、それは」

言われてみればそのとおりで、あたしはコイツとふたりきりで飲みに行く……杳に――

杳に、見送らせた。

さあつと血の気が引く。

「か、帰る、あたし」

「惟？」

「ロックウエルは見たいけど、だけど、もっと」

もっと大事なんだ、杳の笑顔のほうが。

「おい！」

踵を返したあたしの腕を、今度は史朗が掴む。

「……つまらねエ女に成り下がってんじゃねえよ」

「放してよ、史朗には関係ないでしょ」

「そのへんの女みたいに、適当な男に飼ひ慣らされるなよ。おまえは、自由すぎるくらい自由なところがいいんだ」

「うるさい、あたしはアンタに好かれようだなんてハナから思っちゃいないわよ」

史朗の手を振り払おうとしても、できない。痛い。熱い。怖い。

「ロックウエル、あれは惟のために――」

「それ、僕も見せて頂いていいですか」

えっ？

史朗の太い声に重なって聞こえたのは、聞き覚えのあるハイトーンボイスだった。あたしは声の方角を振り返り、目を見張る。

「ロックウエルのリトグラフ、先生だけ見られるなんてずるいですよ」

杳、どうしてここに。

驚くあたしの目の前で、彼はいつもの綿あめスマイルを披露する。

「僕、チーズなら美味しいお店、知ってますよ。その駅ナカにあるんですけど、よかつたらご案内しましょうか」

なんだおまえ、と魂の抜けたような顔で史朗は咬く。あたしはその隙をついて手をふり払った。

「惟さんの朝食のオムレツには、そのモツツアレラを入れるのが定番なんです。さっぱりしてて美味しいって、いつも褒めてくれて。ね？」

「え、あ、うん」

野獣が訝しげに眉をひそめる。

「朝食……？」

対し草食動物は怯む様子もなく、無邪気な動作で野獣の腕を引いた。

「だから僕も連れてつてくれませんか？」

わざと、だ。

直接的なことは一切口にしないのに、さりげない牽制が伝わってくる。しかもその手口は史朗の誘い方をうまく逆手にとったようなもので、これ以上ないまでに効果的だった。

僕の惟さんに！　なんて飛びかかったところで、杳が史朗に腕っ節で敵うはずはない。ましてや口が上手い史朗のこと、絵を見せようとしただけだ、なんてかわされたら肩透かしもいところ。

けれどこんなふうになんか懐かれてしまつては――

「……あ、ああ、いいけど」

断るほうがおかしいもの。

「やったあ！　ありがとうございます、名嘉さん」

それは、草食動物が肉食獣に勝利した瞬間だった。お見事としか言いようがない。

そんなことであたし達は共にロックウエルのリトグラフを拝み、苦りきった顔の史朗にお礼を言つて、真夜中に帰宅したのだった。

マンシヨンの階段に、カツカツとヒールの音だけが響く。妙に静かだ。

杳が珍しく無言だったから、あたしもなんだかしゃべりにくくて、口を結んだままでいた。

やっぱり怒つてるのかな。嫌われたかな。不安でたまらなくて、玄関をくぐるなりその小さな背中を抱きついてしまった。

史朗に言わせれば、あたしは今、完全につまらない女に成り下がっているのだろう。別にいい。

それでも杳が欲しいから。

「……ごめん、別の男と二人きりで飲んだりして」

「単なる接待じゃないですか。謝らないでください」

杳はあたしの腕をぼんぼんとやさしく叩いてくれる。

「僕のほうこそ、便利な男でいいって言ったくせに……すみません、でしゃばっちゃって」

向き合うと、妙に切ない瞳で見上げられてつらくなった。彼氏なのよ、つて史朗にはつきり言えよよかったな。言おうか言うまいか、どうして迷ったのだろうか。

「杳はただ便利だけの男なんかじゃないわ。もっといろいろ、あたしに言う権利、あるのよ」

「いろいろ、ですか」

「うん。他の男とふたりで会うとか、メアド交換するとか」

仕事上、それは不可能だということとはわかってはいたけれど、でも、そんなわがままをひとつでも

言ってほしいと思った。

「……じゃあ、ひとつだけ」

杳は背伸びをして、あたしの頬にキスをする。それだけで満たされていく、自分が不思議だ。

「今すぐ、僕のものになってもらえませんか」

なだれ込んだ寝室で、いつになく強く抱き寄せる腕が心地よかった。暗黙のうちに所有権を主張されているみたいで。

だからあたしはその勢いのまま杳の勝手を許し——といつてもそこは杳だけに、それほど無茶な行為はされなかったけれど——そしてあたしは途中から、さりげなく、彼の上へとよじ上ったのだった。

「……ん、っ」

体勢が逆転するときに浅くなった結合が、体重の移動でぐっと深まる。それはあたしのナカの最も奥にある、敏感な部分を軽く抉った。

杳は苦悶にも似た表情を浮かべ、両腕をこちらへ伸ばす。

「ゆ、いさん」

「うん？」

「触らせて、ください……」

あたしはその手をさりげなく胸元へ導きつつ、ゆるゆると前後に腰を揺らした。すでに潤っていたあの周辺はなめらかに擦れて、とろけそうなくらい、いい。

珍しく強引に両胸を掴まれたら、その驚きで内側がきゅうっと収縮した。

「んあ、っ」

どうしよう、別人みたい、今日の杳。

あたしの動揺に気付いてか、その手はさらに強い力で胸を弄びはじめる。時々指の間に先端を挟まれて、そのまま持っていかれそうになるのがたまらない。

彼の手の熱さに酔いながら、上体を反らせた。内側のソレが下腹方向への反発を強め、甘い痺れを引き起こす。

「っ、ん、ふあ」

好き、この体勢。

体のうしろに両手をつけて、慎重に、先程より深く、ゆっくりと抜き挿しを始める。

「う、っく、あ、っあ」

「っ、惟さん、上手すぎます……っ」

「本当に？ 杳、ちゃんと、感じてる……？」

「……っは、い」

杳は声を震わせながら上半身を起こし、あたしの胸の先を舌で捉えた。少し舐められたあと、強

めに吸われる。過敏になったそこは、それだけで飛び上がるほどよくて――

「ん、っ、――っ」

だめ。

うっかり弾けかけたところで上体を折り、杳の唇を覆うように奪った。まだ、駄目。杳をもっと、よくさせるまでは。

年上のプライドもあつたけれど、半分は、史朗のことに対する自省がそうさせた。今日は自分の快感を優先させてはいけない、と。

腰の動きをとめてしまったことを誤魔化すように、深いキスをする。でもちよつと油断していたら歯列を裏側からなぞられ、ナカがびくんと動いてしまった。

「ん、んんっ……ぶ」

だからだめだつては。今は自分の快感を優先させたら駄目。

頭ではわかっているのに体は裏腹で、もはや、指の間をすり抜ける杳の髪感触にさえくらくらする始末だつた。イヤ。踏ん張ろうと、ぎゅつと拳を握りしめる。

しかし――

「っんああっ!」

突然、腰をぐつと押さえつけられて悲鳴を上げてしまった。わざと浅めに留めておいたそれが、奥まで押し込まれている。

「あ、あ……っ」

膝に力が入らない。そんなあたしを、杳は下からグイグイ突き上げてくる。奥の奥まで、かき混ぜるように、ぐちゃぐちゃと音を立てて。

「や……っは、あ、だめ、コレ、ダメえっ……」

涙と一緒に、なにかが込み上げてくる。おかしくなりそう。ううん、もう、なってる。

「よ、杳っ、よ、う……っ、ま、待っ」

「惟さん、涙声、すぐ色っぽいです」

「んっ……いやっ、お願い、まだ、ヤあっ」

まだ、杳のこと、気持ちよくさせてないのに。

荒っぽく腰を押さえつけられ、固定された状態で下から激しく抜き挿しされて、あたしは必死でかぶりを振る。

「だ……っめ、いやあっ……!!」

涙で滲んだ景色の中、彼が少し、笑った気がした。

「嫌? 嘘でしょ」

そうして、直後、胸の先端を舌の腹でぐにゅりと撫で回されたら――

「あ、んあっ、あ、ふああああんっ!」

頭の中のヒューズは、あっけなく飛んでしまったのだった。